

## 5-2 歴史資源アーカイブ国際高度学芸員養成計画（大学院GP）

### 研究・教育活動の概要と特色

文部科学省補助金による本大学院GPは、平成20年9月30日付で内定通知があり、平成23年3月31日をもって終了の予定であった。東日本大震災の影響により、最終年度の補助金執行は繰り越しの措置がとられ、3月に予定していた大学院生研修、事業成果報告書の刊行等を行なった。平成23年6月30日に本GP事業は終了した。

我が国の「成熟社会化」への進行のなかで、人文知の確かな継承と創造のための機構整備は社会的な要請であり、歴史学も改革を必要としている。変転めまぐるしい現代にあって、過去の文化の叡智と、人々の生きざまに学ぶ総合的な歴史学への社会的要請は大きく、生涯学習ニーズの広範な拡大がみられる。博物館、美術館、文書館等において、収蔵品研究、保管活用、企画展示などには、常により高い水準が求められるようになった。本GPプログラムでは、これらの要請にこたえる高度な資質の学芸員を、国際性豊かなカリキュラムのなかで体系的に育成することをねらいとした。専門分野に深い学識を有し、かつ幅広い対象資料に通じていて、世界各国の学芸員と対等な活動ができる世界水準の優秀な人材の着実な養成は、喫緊の社会的急務である。それは本研究科の人材養成目的にも合致する。

従来、学芸員教育は、細分化した専門分野において行われてきた。優れた学芸員はこれまでも多く育ってきたが、いわば個々の教員や研究室が有する個別の技量に依存してきたという点は否めない。学芸員の国家資格も、5科目12単位を要件とする学部卒業の資格であり、現今の社会的要請とはギャップが大きかった（平成24年入学者から資格要件は改訂）。現実には大学院教育が必須であった。本GPは、いわば個人わざ頼みの現状を改革し、組織的な養成課程として体系化することをめざした。日本のリーダー的学芸員の養成に重点をおくことで、また歴史学全体における大学院教育の改革への牽引車としての役割を果たすことも目標としている。

本歴史科学専攻では、文字史料に加えて考古資料、美術資料など多様な形を取る原資料を「歴史資源」として捉え、個別分野横断的な研究方法、新たな資料学・史料学の構築、その社会的公開をめざして、平成14年度から共同の教育研究活動を重ねてきた。本GPでは、古文書、遺物・遺跡、絵画・彫刻など様々な形態の資料を、統合的に蓄積する「歴史資源アーカイブ」を媒介にして、大学院学生たちを原資料に、現場で、実地に取り組みせる教育プログラムを発展させる。すなわち、各分野で個別に行われてきた学芸員教育を、実物・原典資料を通じてリンクさせ、専門性と広域性を同時に醸成していく。

二つの学芸員養成コースを新たに設置した。考古学、東洋・日本美術史、美学・西洋美術史からの、モノ資料を主な対象とする教育分野を「キュレーター養成コース」、日本史、東洋史、ヨーロッパ史からの、文献史料、木簡、金石文などを対象とする教育分野を「アーキビスト養成コース」として、シラバスを別冊としカリキュラムを体系化している。それぞれの分野での資料の特性を踏まえた高水準の実物教育を行う。前者は美術館、文化財研究所、博物館、埋蔵文化財センターなどで、後者は博物館、史料館、公文書館、図書館などで国際レベルの活躍ができる人材を養成する。

博士前期課程においては、まず各自の専門分野の原資料に堅実に取りこませ、歴史資源のもつ本質について良く理解させる。特論、研究演習、研究実習等で、正統的な原典主義を徹底して学ばせる。授業では実物教育・実地教育の機会を豊富に提供し、各自の志望進路を加味した学際的な選択を用意し、修士論文へ展開させる。隣接分野の科目履修により、原資料の実態に存在する歴史資源の多様性の認識を深める。

学芸員としての国際的素養を醸成するため、博士前期・後期課程を通して、教員主導の海外実地教育を実施する。

博士後期課程では、学術雑誌への論文掲載指導を通して、原資料から論文に至るプロセスについて正確に把握させる。学内公募により、大学院学生自身に歴史資源研究のプロジェクトを企画・立案させ、教員の指導の下で実施させることで、健全な競争的環境を作り、研究の計画と実施に関する様々なマネジメント能力を養う。大学院学生の支援成果を「人文社会科学研究（国際高度学芸員研究演習Ⅰ）」において発表させ、隣接分野の実際をも学ぶ機会とする。

TA. RA.にはそれぞれの立場での教育経験を積ませて、歴史資源研究法の「技(わざ)の継承サイクル」をカリキュラム化する。またアーカイブの維持管理を行うシステムを、各分野の歴史資源の特徴に従って確立し、その運営プロセスを通じての教育を行う。東北大学に収蔵されている豊富な資料、また調査資料、画像記録などは、歴史資源アーカイブの一部としてデータベース化し、社会的共有を進める。高度な分析訓練のための設備、デジタルデータの蓄積と活用に必要な機器を充実させる。東北大学総合学術博物館、東北大学史料館、平成8年から連携大学院文化財科学を実施している多賀城跡調査研究所・東北歴史博物館とは、さらに実質的協力を深めて、現場に学び、地域と連携する機会を拡大する。

## I 組織

### 1 大学院GP担当教員（2011年3月末現在）

- ・キュレーター養成コース

教授 阿子島香（考古学専攻分野・文化財科学専攻分野）

教授 泉武夫（東洋・日本美術史専攻分野）

准教授 芳賀京子（美学・西洋美術史専攻分野）

・アーキビスト養成コース

教授 大藤修（日本史専攻分野）

教授 川合安（東洋史専攻分野）

准教授 有光秀行（ヨーロッパ史専攻分野）

## 2 登録学生数（2011年3月現在）

大学院博士 前期	大学院博士 後期
22	23

## 3 コース修了者数（2010～2015年度）

年度	アーキビスト・コース	キュレーター・コース
平成 22 年度	3 (0)	8 (1)
平成 23 年度	6 (3)	5 (1)
平成 24 年度	1 (0)	8 (1)
平成 25 年度	1 (0)	5 (4)
平成 26 年度	1 (0)	2 (2)
平成 27 年度	0	4
累計	12	32

( ) 内は満期退学者への退学後の修了証発行数

## II プログラム開始からGP事業終了までの教育活動

平成 20 年度は東北大学文学研究科が蓄積してきた歴史資料の、歴史資源としての体系化、アーカイブ化に着手した。マイクロフィルムスキャナー、ワークステーション、デジタルマイクロスコープ等の教育研究設備を充実し、歴史科学専攻を構成する6研究室の大学院学生の研究を支援するとともに、収蔵する歴史資源の資料デジタル化を推進した。東洋・日本美術史（仏画・仏像）、美学・西洋美術史（絵画・彫刻）、ヨーロッパ史（オーストリア）の画像資料デジタルアーカイブ化を進めた。日本近世近

代史の最重要資料である斎藤家文書の整理を進めた。歴史資源研究指導のため、重要資料・図書資料を購入し教育基盤を整備した。ヨーロッパ史（ヴェリ斯拉フ聖書他装飾画入中世写本ファクシミリ版）、東洋史（雍正朝内閣六科史書・吏科）資料は特に充実した。大学院学生の高度学芸員教育を推進するため、二つのコースを設置した。考古学、東洋・日本美術史、美学・西洋美術史を中心にキュレーター養成コース、日本史、東洋史、ヨーロッパ史を中心にアーキビスト養成コースを発足させた。歴史科学専攻の博士前期課程カリキュラムで、両コースの授業科目を設定した。歴史資源教育研究の RA を 8 名、授業カリキュラムでの TA を 11 名雇用して事業を進めると同時に大学院教育の実質化を推進した。アメリカ人講師の国際セミナー（考古学）を実施した。歴史資源（文化財資料）の自治体博物館特別展等への貸し出し・掲載を積極化し、社会的公開・活用を進めた。実務推進のため、大学院 GP 事務室を設置し、専属の助手を採用した。

大学院学生を単独で海外（フランクフルト、ヴェネツィア、上海、北京）、国内（奈良、京都、東京）に派遣し研修させた。現地研究により美学・西洋美術史、東洋史、東洋・日本美術史分野で、大学院学生の歴史資源認識は非常に深化した。日本史分野では重要古文書の整理に直接関与することで、アーキビスト教育の高度化に大きな成果があった。東北大学史料館の資料充実に貢献し、また RA 経験で教育効果を見た。キュレーター教育では、東北大学総合学術博物館の兼務である教員が引率し、アメリカ（スミソニアン機構自然史博物館）で国際高度学芸員の資質養成の研修を、すべて英語で実施した。展示デザイナー・収蔵施設員・教育解説員と直接インタビュー研修し、現場で世界水準の展示設計を学ばせた。歴史資源ワークショップ（石器資料の顕微鏡観察）を専門研究会と連携して実施、また石器石材現地調査を実施し、教育効果があった。RA と TA は歴史資源アーカイブの基盤整備、研究方法の「技の継承」に成果があった。総合学術博物館の企画展示と連携しての学芸員教育は、歴史資源データベースの充実と社会貢献、授業・研修が総合される成果があった。ロシア科学アカデミーシベリア支部、ワイオミング大学と平成 21 年度の大学院生研修・学術交流計画で合意した。

平成 21 年度は文学研究科歴史科学専攻に設置した二つのコースにおいて、高度学芸員教育を深化させた。キュレーター養成コース、アーキビスト養成コースのそれぞれにおいて、コースカリキュラムを学際的に編成し、大学院生の両コースへの登録を実施し、コース履修させた。コース専用のシラバスを別冊として作成し、歴史科学専攻所属の大学院学生に配布した。修士課程修了者 7 名に文学研究科として修了証を授与した。歴史科学専攻の 6 研究室において、歴史資源のアーカイブ化を進め、大学院教

育に活用する事業を推進した。一関市芦東山記念館所蔵文書の整理を進めた。歴史資源関係図書を購入し、教育・研究環境の充実化を図った。遺跡調査システム・二次元画像解析システムを導入し、歴史資源資料のデジタル化を推進した。また、歴史資源を社会に公開し、博物館・美術館等での社会貢献に貢献した。総合学術博物館常設展リニューアルに伴い、旧石器・新石器ブース展示の企画から展示作業を大学院学生に研修として実施させることにより、博物館学芸員としての素養向上を図った。大学院学生を国内および海外の歴史資源研究、国際研修活動において実地指導し、また大学院学生によるプロジェクトを公募し、支援した。15件のプロジェクトを採択し、「歴史資源個別分析プロジェクト事業」および「海外歴史資源教育研究事業」を推進した。「歴史資源個別分析プロジェクト事業」では、海外(イタリア・ドイツ・アメリカ・中国)、国内(宮城・東京・静岡・京都)に大学院学生を派遣した。「海外歴史資源教育研究事業」では、イタリアとアメリカに大学院学生を派遣し、一部事業については教員が引率して、現地で指導に当たった。その成果をもとに、新たに授業科目として開設した「人文社会科学研究(国際高度学芸員研究演習Ⅰ)」で13件のプロジェクトを発表させた。発表後には、各専攻分野を横断した議論が活発に行われ、学際性を養うことができた。「国際フィールドスクール(山形県真室川町埋蔵文化財調査実習)」を実施し、ロシア(サハリン州立博物館)の学芸員によるロシアでの発掘調査方法の実地指導から、発掘調査の方法・技術について国際性を涵養した。また、東北史学会と学際的に連携して、アメリカ(スミソニアン機構自然史博物館)・ドイツ(ミュンヘン大学附属石膏博物館)・日本(学習院大学)のキュレーター・アーキビストを招聘し、国際シンポジウム「文書館・博物館のこれからとアーキビスト・キュレーター養成」を実施した。国際高度学芸員を養成する課程を実質化し、RA(前期7名・後期7名)・TA(前期12名・後期12名)の活動を通じての大学院学生教育を進めた。海外機関と連携しての大学院学生研修を推進した。各専攻分野教員が引率し、海外(中国・フランス)、国内(岩手・京都)で研修を行った。また、大学院学生を単独で海外(中国・イタリア)、国内(青森・秋田・岩手・福島・東京・神奈川・長野・滋賀・京都・奈良・岡山)に派遣し研修させた。中国(東洋史)・ドイツ(美学・西洋美術史)・ロシア(考古学)から講師を招聘し、国際セミナーを4回実施した。ロシア科学アカデミーシベリア支部との学術交流については、研究者を招聘して国際セミナーを実施した。ワイオミング大学との大学院生研修計画については、東北大学の院生1名がワイオミング大学の発掘調査に公募プロジェクト枠で参加した。

平成22年度も引き続き前年度と同様の事業方針で高度学芸員教育を推進した。歴史資源資料のアーカイブ構築と、これを基盤とする積極的な社会的公開を推進した。東

北福祉大学芹沢銈介美術工芸館との SMMA クロス展示（仙台市教委取りまとめ）として、総合学術博物館で宮城県加美町切込出土の陶磁器が展示され、考古学専攻分野所属大学院学生が展示補助の研修を行った。総合学術博物館で開催された第5回博物科学会において、阿子島教授が「『歴史資源アーカイブ国際高度学芸員養成計画』（大学院GP）の目指すもの」と題して特別講演を行った。当GPの取組実施担当教員が幹事、パネリスト等として重要な役割を果たしている地中会学会大会、西洋史研究会大会の共催事業を行った。マルチメディアホールで行われた地中海学会では、大学院GP事務室が記録担当として運営補助に当たった。

東北大学文学研究科が蓄積してきた各種歴史資料について、歴史資源としての体系化、アーカイブ化を通じて教育を行い、大学院生の研究を支援し、また社会貢献をすすめた。大学院生の高度学芸員教育を進めるため、本GPにより設置した二つのコース（キュレーター養成コース、アーキビスト養成コース）について、学際的に再編成したGP別冊シラバスを作成した。両コースの登録者は、修士1年から博士3年までを通して、22年度は計45名であった。またGP授業科目として「国際高度学芸員研究演習Ⅰ」を継続開講した（院生15名が履修）。歴史資源教育研究のRA(前期7名・後期7名)、授業カリキュラムでのTA(前期12名・後期12名)を採用して事業を進めると同時に、大学院教育実質化を推進した。

22年4月に国際シンポジウム「フランス考古学の現在」を開催した。東北大学大学院文学研究科考古学研究室と共同主催で実施した。ソルボンヌ大学とCentre National de la Recherche Scientifiqueの研究者を招聘し、「Technological evolution through the end of the Paleolithic –A Comparative perspective from France–」シンポジウムは発表・配付資料ともに全て英語で進められ、聴講した大学院学生にとって国際的な水準を学ぶ良い機会となった。また、海外の研究者から直接に原語・英語で学ぶ「国際セミナー」を、フランス(考古学)・イギリス(美学・西洋美術史)・中国(考古学)の講師で3回開催した。

養成コースに登録した大学院生を対象とし、学内公募方式の「院生プロジェクト」を実施した。前年度より枠を増加し、24件の院生プロジェクトを採択した。「歴史資源個別分析プロジェクト事業」では、海外(イタリア・フランス・ドイツ・オーストラリア・中国)、国内(北海道・東京・愛知・石川・京都・奈良・長崎・鹿児島)に大学院学生を派遣した。「海外歴史資源教育研究事業」では、イタリア・フランス・モンゴル・韓国へ大学院学生を派遣し、一部事業については、各専攻分野教員が引率し、現地で指導に当たった。これらの成果については、「人文社会科学研究(国

際高度学芸員研究演習 I) 」で発表させた。専攻分野を横断した議論が活発に行われ、学際性を養うことができた。

埋蔵文化財調査実習の「国際フィールドスクール」を、最新機器を活用して山形県真室川町丸森 1 遺跡で実施した。ロシア（ノヴォシビルスク教育大学）の大学院学生も参加した。海外高水準の大学の院生と直接交流させることは、本学の院生の教育に大きな効果があった。発掘調査において、同じクラスの院生たちが共通言語で共同作業を進め、本学の院生の国際的素養を深めることができた。これは、ロシア科学アカデミーシベリア支部との学術交流の一環であり、交換訪問として東北大学の院生 1 名がロシア科学アカデミーによるモンゴルでの発掘調査に公募プロジェクト枠で参加した。

総括すれば、大学院生の実地研修は、歴史資源研究および高度学芸員養成の相乗効果を得たといえる。国内においても各分野の指導的な博物館、美術館、文書館、資料所在地での研修を実施した。本 GP の財政支援による実地研究により院生教育は飛躍的に進展した。歴史資源アーカイブはデータベース化を進めており、各専攻分野の成果の一部を報告書として刊行した。22 年度国際シンポジウムでは、人類史上の転機である氷河時代終末期における文化変動について先端的な議論が深められ、地球的視野での教育効果があった。地中海学会、西洋史研究会との大会共催では院生参加による教育成果があった。連携大学院方式による国特別史跡多賀城跡の発掘調査実習では、本格的な現場実習による成果が顕著であった。

22 年度は、大学院 GP 事務室に研究助手、GP 支援室に事務補佐員を雇用し、GP 事業の円滑な遂行にあたった。GP の事業成果を編集し、「平成 21 年度院生プロジェクト成果報告書」「平成 21 年度事業成果報告書」「平成 20～22 年度歴史資源アーカイブ成果報告書」「平成 22 年度事業成果報告書」を刊行した。後 3 冊は、東日本大震災の影響により、予算繰越による発行となった。各種 GP 事業の成果報告書は、参加者ほぼ全員および指導教員の寄稿により、3 年間分で計 5 冊、総ページ数 1829 ページのものとなり、本 GP 事業による教育成果を異分野間で学際的に共有するとともに、広く社会に向けて発信する成果にもなった。

平成 23 年度には、日本学術振興会による「事後評価」を受けて、評価「B」（目的はほぼ達成された）を得た。この事後評価結果については、学振の HP にて社会に公開されている。GP 終了後の現在も、二つのコース（キュレイタ

一養成コース、アーキビスト養成コース)は、継続して実施され、大学院生はそれぞれの専攻分野における学芸員教育を中核に、幅広く履修し、コース修了証を手社会へと巣立っている。